

第33回

「地球温暖化」をはじめとする環境問題がますます身近になる一方で、世界の国々が賛同できる国際枠組みの構築は困難な状況にあります。

このような状況下で対策が急がれる中、国際社会はどのように取り組むべきなのでしょう。

CSRの最先端アメリカでの実体験をもとに日本企業向けのCSRコンサルティングを行うコーポレートシチズンシップ代表の雨宮氏から世界で行われている地球環境問題解決への取り組み等について、ご紹介いたします。

コーポレートシチズンシップ 代表取締役 雨宮 寛氏



アメリカの初・中等教育の改革者 ティーチ・フォー・アメリカ(TFA)

筆者が留学していたハーバード大学で毎年開催されている「ハーバード社会起業大会」。2010年から旅行会社のエイチ・アイ・エス主催で同大会に参加するツアーを企画・実施しています。今年で3回目を迎えた本ツアーを2月24日から3月1日の日程で実施し、無事に終了しましたので、今回は本ツアーについて記したいと思います。

本ツアーはツアー期間の前半にハーバード社会起業大会に参加し、その後、ハーバード大学のあるボストンからニューヨークに移り、後半はニューヨークで活躍する社会起業家やソーシャル・ビジネスを訪問する内容になっています。日本からの参加者は、大学生、大学院生、社会人、教授等々、総勢23人が参加しました。

ハーバード社会起業大会は年々、スケジュール、内容ともにパワーアップしています。今年は大会2日間ともにほぼフル・スケジュールでした。第一日目はハーバード大学の公共政策学や国際開発学を専門とする大学院のケネディ・スクールで開催されました。正午には最初のワークショップが始まり、基調講演、その後は複数の部会に分かれてのセッションと、世界の最先端の社会起業の取り組みや世界各国の政策や規制、問題点などがプレゼンテーションされました。第二日目はハーバード・ビジネス・スクールに場所を移して開催されました。この日は早朝からのス



ハーバード社会起業大会ケネディ・スクール

ケジュールです。社会起業の父といわれるアショカの創設者ビル・ドレイトンの講演があり、部会、基調講演、ワークショップと社会起業やソーシ



ハーバード社会起業大会ビジネススクール

ャル・ビジネスの現状を理解する上で非常にためになる話を聞くことができました。また、同じような意識を持つ人達が参加しているので、考えている以上に、多くの人々と仲良くなれます。名刺交換などを通じて、多くの社会起業家の人々や企業関係者の人々と知り合うことができました。

そして、ツアー後半のニューヨーク訪問です。ニューヨークでは、4つの機関および現地の小学校に訪問しました。世界のマイクロファイナンス機関に投融資をするDWMアセット・マネジメント、民間営利企業を社会面で評価・認証するブラボ (BLab)、アメリカの初・中等教育の底上げに大きく貢献するティーチ・フォー・アメリカ (TFA) とTFAの教員が教える現地公立学校、そして世界の地政学リスクを分析し、コンサルティングを行うユーラシアグループです。本寄稿では、TFAの教員の人たちが教える現地公立学校について記したいと思います。TFAは約20年前にエール大学の学生だったウェンディ・コップさんが貧しい人たちに良い教育の機会を提供しようと設立したNPOです。おもに卒業を控えた大学生を卒業後約2年間、公立の小中学校に教師として派遣

させることに取り組んでいます。低所得者層の多い地域の公立小中学校の子供たちにより良い教育を受けさせ、夢でしかなかった大学進学を目標とさせることに重点を置いています。大学生の人たちも、教育環境に恵まれない子供たちが大学を目指すまでに成長することにやりがいを感じ、現在、TFAは大学生の就職先人気ランキングで、ゴールドマン・サックスやゼネラル・エレクトリックなどの米国を代表する企業と伍して常に上位に位置する機関になっています。TFAのような組織は日本では存在しないので、非常に興味を持って今回はTFA本部およびTFAの教員が派遣されている現地の小・中学校（学校名：コニーアイランド・チャーター・プレップ）に行きました。とくに現地の学校訪問は衝撃的でした。ある意味、日本の私立と公立の学校を足して二で割ったような感じなのかもしれません。公立の学校なのですが、子供たちは制服を着ています。授業中は姿勢良く座って、私語もなく、TFAから派遣された先生が教室の中ほどにプロジェクターを置き、ホワイトボードとスライドの投影を駆使しながら授業を行っていきます。

先生の教え方が上手と一言で言うてしまうこともできるのですが、先生というよりもエンターテイナーに近いと思いました。たとえば、算数の時間であれば、その日の授業内容をしっかりと教えていることは当然ですが、先生が生徒たちに授業へ参加するよう促す導き方が非常に上手だと感じました。同じ教室の中に、優秀な子もそうでない子もいると思うのですが、そういうことを感じさせないように、生徒全員が授業に参加できるような雰囲気を作り出すのが上手でした。

筆者自身も2人の小学生がおり、ともに地元横浜の公立学校に通っています。日本の小学校の先生も、全生徒が授業に参加するように非常に苦労をされていると授業参観などで強く感じています。まさに、同じような光景がニューヨークで見ることが出来ました。

ここまでで



現地小学校教室風景

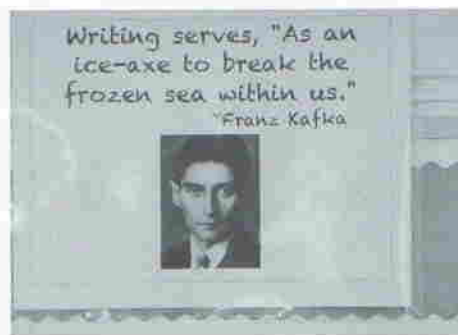


2023 Tシャツ

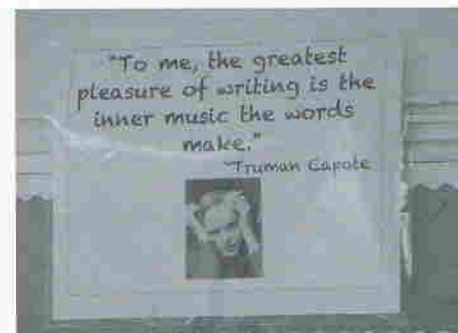
あれば、荒れたアメリカの公立学校が改善してきて、日本並みになってきた、ということで終わってしまいましたが、今回はもう一つ発見がありました。それは、なぜ勉強するのか、ということについていろいろな方法で生徒たちに動機付けさせているということです。

一つには多くの子供たちが大学を卒業する年（日本の小学4年生にあたる子供たちが大学を卒業するのは2023年頃なので2023年）の書かれたTシャツを来ていました。日本同様に、アメリカにも多くの大学がありますが、子供たちが小学校の時点で、大学進学を目標とし、きちんと卒業するということを日々思っ小学学校生活を送っていることはとても大切だと感じました。もう一つは、国語の授業で自らの考えを感想文や作文に書くということに対して、カフカやカポーティの言葉を教室の前に飾るなどして、自分の考えを書いて表現することの大切さを伝えていました。このような生徒たちの学問への興味や関心を絶やさないと試みが学校全体でみられました。経済格差や教育格差などの格差社会への危機感からこのような教育方法が注目されているのかもしれませんが、日本の公立の小・中学校にも大いに参考となるのではないかと思います。

※すべての画像の撮影は「ワールドスタディ」



「カフカ」：モノを書く事は、凍り固まった自分の心をビツケル（砕氷斧）で壊すようなものだ。



「カポーティ」：誰に聞こえるわけではないが、モノを書く時に語句が奏でる音を聞くことが最も楽しい瞬間である。

略歴

コーポレートシチズンシップ代表取締役。DWMアセット・マネジメント；DWMインカムファンズ日本代表。明治大学公共政策大学院兼任講師。CFA協会認定証券アナリスト。NPO法人ハンスオン東京理事。コロンビア大学ビジネススクール経営学修士およびハーバード大学ケネディ行政大学院行政学修士。クレディ・スイスおよびモルガン・スタンレーにおいて資産運用商品の商品開発を担当。2006年コーポレートシチズンシップを創業。「あなたのTシャツはどこから来たのか？」（ピエトラ・リポリ著 東洋経済新報社）「暴走する資本主義」「余震 そして中間層がいなくなる」（ロバート・ライシュ著 東洋経済新報社）などを翻訳。「アショカDVD・社会起業家シリーズ」監修。